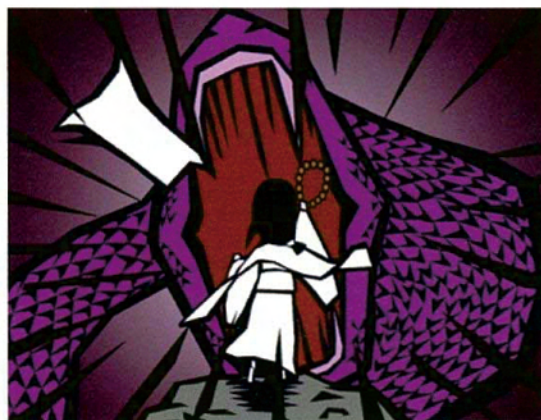
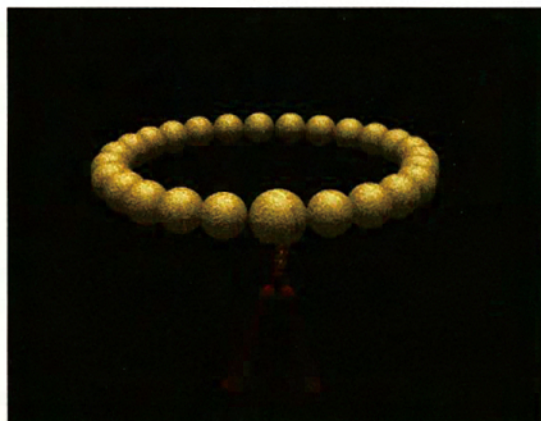


1. 産官学連携プロジェクトの研究・開発



映像コンテンツデザインの研究・開発

近江八幡市

研究・開発テーマ：伝統工芸技術の伝承記録映像の研究・開発・DVD制作

指導・監修教員：小林はくどう（デザイン科教授）

開発担当：映像・放送クラス学生、CG・アニメーションクラス学生計10名

＊平成18年度事業（平成19年3月31日終了）

木珠（もくじゅ）は木製の数珠のことで、全国の7割を近江八幡市内で生産しているが、このことはあまり知られていない。近江八幡のほとんどが半製品で、1400年の伝統工芸の歴史の間、京都などから受注生産してきたからである。近年は株式会社カワサキなど若手経営者がアンテナ・ショップやインターネット、物産展などを通じて完成品を販売し始めている。この様な背景から、近江八幡市との産官学連携により、8ヶ月をかけて木珠数珠についてのDVDを制作した。職人など後継者への伝承、産業界や市民などへの啓蒙活動、全国の物産展などでの広報活動、小学生たちへの地場産業教育など多面的な用途を意識してシナリオを書いた。文献は意外と入手できなかった。市史な

どの資料では江戸時代の木珠組合について多く触れられていたが、分かりがたいことから大幅にカットし、小学校四年生が郷土史や地場産業を調べる際に役に立つ、興味を持てる内容にした。制作にあたっては放送研究会の多くの学生たちが担当し、幼い子供でも楽しめるようCG、アニメーションを駆使して表現していることが大きな特色となっている。イントロの数珠に関する民話では、長者の女房が巨大なへびになり、生贄の女性の数珠が退治したアニメである。数珠の効能、近江八幡の木珠の歴史、古老が再現してくれた伝統工法、市内工場での生産工程などを織り込んだ内容となっている。学内で制作されたこの映像コンテンツは評判も良く、TVなどのコンテンツに決して劣ることはないと自負している。

平成18年制作15分59秒

制作・著作＝成安造形大学

企画＝近江八幡市

監修・シナリオ＝小林はくどう

文：小林はくどう（デザイン科教授）



街づくり・空間デザインの研究・開発

大津市

研究・開発テーマ：遊休土地利用「雄琴住宅計画」デザインの研究・開発

指導・監修教員：人長信昭（デザイン科教授）

開発担当：住環境デザインクラス学生4名

大津市からJR雄琴駅近辺にある売れ残った土地をいかに販売するかの相談を受けた。敷地は3カ所で、学生4名でチームを組んで、なぜ売れ残ったかを調査した結果、次のようなことが判明した。① 敷地が100坪～130坪と付近の住宅地に比べて広く、したがって価格が高いこと、② 敷地は斜面地であること、③ 付近の住宅では2、3台の駐車スペースがあるのに1台分しかとられていないこと、④ 高台に位置しているにもかかわらず眺望がよくないことなどがあげられる。購買層、家族形態、建築条件、法規、土地の特性、傾斜地の利用法などを検討した結果、① 住宅で教室が開けるアトリエや工房、サロンを持つ住居、② 一戸建ての雰囲気を持った集合住宅、③ 広い敷地を利用したガーディナーのための住居、④ 独身者が共同で作る多世帯住居の4つのパターンについて検討した。3つの敷地に対して合計9つの建築計画を提案した。大津市はこれを受けて住宅業者に対してのプレゼンテーションを行った結果、すべて販売を完了した。現在、業者はこれらの案を参考にした建設を実施している。できれば実施設計を学生たちとおこなうことができるかと期待していたが、実現できずに終わったことが心残りである。次回はぜひとも学生たちと実施設計や工事監理もおこなって生きた授業としたいと思っている。

文：人長信昭（デザイン科教授）



グラフィックデザインの研究・開発

NHK（日本放送協会）大津放送局

研究・開発テーマ：環境・びわ湖をテーマにした壁画デザインの研究・開発

指導・監修教員：岩村隆昭（デザイン科教授）

開発担当：グラフィックデザインクラス学生1名

この研究・開発は平成19年11月に滋賀県で開催された第27回「全国豊かな海づくり大会」を期して、NHK大津放送局から正面玄関の壁面にびわ湖をイメージした壁画デザインの要請があったことにはじまる。

当初、さまざまなアイデアを検討したが、単にびわ湖のイメージを絵画的に美しくデザインすることではなく、びわ湖の崩れゆく生態系メッセージ性を強くアピールすることをグランドテーマとし、びわ湖に生息する魚をモチーフに、減少するそれらの魚を紹介することを提案した。びわ湖には、“ほんもろこ”をはじめ、“びわこおおなまず”、“びわます”など、固有種も多く生息する。それらの魚は環境（水質や生息地）の変化、外来魚の影響で、年々、減少の一途をたどっていることは周知の事実である。しかし、それらの魚がどのような色、形でどのような大きさか意外に知られていないことも事実である。

壁画デザインではそれぞれの魚の形の特徴を捉え、単純化し、固有色を基本にグラフィカルな色調で表現した。作者の正田君の適確で優れた造形力、構合力で説得力のある壁面の魚図鑑ともいえる、壁画デザインに仕上がったと考える。

文：岩村隆昭（デザイン科教授）



キャラクターデザインの研究・開発

大津商工会議所

研究・開発テーマ：大津祭曳山連盟公式キャラクター及びグッズ
デザインの研究・開発

指導・監修教員：田中真一郎（デザイン科准教授）

開発担当：イラストレーションクラス学生5名

産官学連携プロジェクト活動の一環として、特定非営利活動法人大津祭曳山連盟+大津商工会議所+成安造形大学のコラボレーションで、歴史ある大津祭の公式キャラクターを開発した。

大津祭は、江戸時代初期の古くから約400年間の歴史を持つ。現在も受け継がれている13基の曳山には、優美な装飾が施され、それぞれに故事に基づくカラクリ人形が仕組まれ、毎年披露される。その趣の深さは、町人文化の華として多くの人に親しまれる、湖都・大津の伝統文化、地域資源でもある。祭り自体は、1日目の宵宮に始まり、クライマックスの2日目の曳山巡行では、厄除けのちま吉が

道ゆく人々に振る舞われる。持ち帰られた粽は、大津の街の家々の玄関先に1年間飾られ、家々を災いから守っている。

今回のプロジェクトには5名の学生が参加し、オリジナルキャラクター『ちま吉』の創作から、キャラクターグッズの展開～販売に至るまでを学生たちが中心になって行った。

『ちま吉』は今年だけでなく、来年からも引き続き大津祭の引き立て役として活躍する予定であるが、デビューをかざる本年度は、ちま吉Tシャツ・ちま吉シール・ちま吉手ぬぐい・ちま吉弁当・ちま吉うちわの5品目をキャラクターグッズとして開発し、祭りの宵宮、本祭で販売した。

『ちま吉』プロフィール

名前：ちま吉

10月10日生まれ・男の子

好奇心旺盛、優しく正義感が強い、おっちょこちょい、お祭りが好き、大津に住んでいる。家々に飾られている粽に精気が宿り、それらが集まって生まれた粽の精霊。

文：田中真一郎（デザイン科准教授）



街づくり・空間デザインの研究・開発

第27回全国豊かな海づくり大会大津市実行委員会

研究・開発テーマ：会場に展示するヨシを活用したモニュメント
のデザインの研究・開発・制作

指導・監修教員：磯野英生（デザイン科教授）

開発担当：環境デザインクラスTA 2名、学生40名

大津市で11月10日、11日の2日間、「第27回全国豊かな海づくり大会～びわ湖大会～」が催されたが、主催の大津市からその会場の入り口に設ける門をヨシでつくらないかという申し出があり、引き受けることになった。この10年ほど、住環境デザインクラスでは、ヨシを使った造形活動に教育の一環として取り組んできたが、その経験を生かしたいと考えたのである。

ヨシは、細く長い。その丈は4mを越すものも多い。今回の取り組みでは、このヨシの長さを素直に生かした表現を行いたいと思った。当初は会場いっぱいにヨシの柱を林立させたいと考えたのだが、予算の関係もあり、結局25本

のヨシの柱を密に並べることでゲートを表現することになった。ヨシの林を抜けることで入場した気分を味わってもらえるのではないかと考えた。このゲートには、「ヨシ原の中津門」という名を付けた。会場が湖畔にあることを配慮し、かつてはヨシ原であったであろうと推測し、日本神話に描かれた「芦原の中津國」という日本の原像を想い起こしていたからであった。

制作は、立神まさ子、山本拓朗両非常勤講師や学生有志とともにいった。模型をつくり、会場での配置を検討し、合計25本のヨシの柱をつくり上げ、その底部には照明を仕込んでおいた。

会期は2日と短いものであったが、夕刻には点灯され、徐々に暗くなってゆく会場で、ヨシの列柱は黄金（こがね）色に輝きを増し、じつに美しいものであった。それを眺めながら、制作の労が報われたという想いがふつふつとわき起こってきた。

文：磯野英生（デザイン科教授）



街づくり・空間デザインの研究・開発

浜大津水辺夏まつり実行委員会

研究・開発テーマ：浜大津サマーフェスタ2007「第2回びわ湖ランタン」オブジェデザイン開発・制作
 指導・監修教員：田積司朗（デザイン科教授）
 開発担当：グラフィックデザインクラス学生5名
 制作協力：立誠まちづくり委員会、
 （財）京都市景観・まちづくりセンター、
 京都アートカウンスル
 開催日：平成19年8月1日～8月6日



びわ湖大津夏祭り（大津・響きの夏舞台セレモニー）

浜大津サマーフェスタ2007「第2回びわ湖ランタン」に幾何学模様の球体オブジェを出展。点々と連なって光浮かぶデザイン造形が、夜のびわ湖を幻想的な雰囲気 연출した。グラフィックデザインを学ぶ三年生によるプロジェクトチームを立ち上げデザイン制作されたランプ。当時、京都木屋町・高瀬川に高さ1～2メートルの高低をつけて川の中に30基設置し高評を得、再び、そのランプが夜のびわ湖に光をそえた。学生有志とともに照明デザインを研究制作し、立体造形のもつ機能・形・素材の理想的な融合に

より、モノの原点を見ることができる。視覚デザイン、情報デザインの基礎は見る人の感覚をどう生かすかが「モノ創り」の一番大切な理念である。

そして未来へつなぐ自然環境との結び合わせが「我が湖都」に夢を創造し、発展を続けたいものである。

文：田積司朗（デザイン科教授）



街づくり・空間デザインの研究・開発

大津まちなか食と灯りの祭実行委員会

研究・開発テーマ：灯りのイベントに展示するランタンのデザインの研究・開発・制作
 指導・監修教員：田積司朗（デザイン科教授）
 開発担当：グラフィックデザインクラス4名
 主催：大津まちなか食と灯りの祭実行委員会
 共催：NPO 大津倶楽部・大津市都市再生課（事務局）
 開催日：平成19年9月13日～12月31日

大津に息づく食の文化や灯りをテーマに、大津市の中心市街にある公共施設や商店街などまちなか全体を会場にした「大津まちなか食と灯りの祭」が9月13日～11月13日まで開催された。大津市のまちの活性を図り、JR 大津駅前から琵琶湖岸に通じる中央大通りの街路樹に、やわらかに彩り光る幻想的なランプシェード「灯りの果実」をイルミネーション展示。果実をイメージした幾何学的模様の球体が路上に浮かび、ケヤキの木々に点々と重なりあう130個の灯りが魅惑的に照らし出された。市民や観光客

からクリスマスまで点灯してほしいなどの声が寄せられ、大晦日まで延長展示。同祭実行委員長を務められた山本進一さんは、今回の展示にエコな灯りとしてLED（発光ダイオード）の光源を製作活用し、平均的に100ワット電球3個分の消費電力というエコロジー面にも配慮された。

成安造形大学デザイン科グラフィックデザインクラス有志によるプロジェクトチームで制作したランプシェードは、その後も産官学の催しに様々な参加発表をしている。



同大学のペーパー立体造形の研究活動の成果である作品がまちの環境や景観美をもてなし活躍。これからの学生たちや社会全体が個人の個性を大切にしつつ、遊びや面白さの中で好奇心を伸ばすことが教育の本道だと思う。

文：田積司朗（デザイン科教授）